



倭文 旅するカジの木 (118分)

語り 富永 愛  
 神話出演 鷹 赤兒  
 KOMI  
 大駱駝艦

倭文制作 山口源兵衛、石川文江、西川はるえ、妹尾直子  
 撮影 明石太郎、戸谷健吾、北村皆雄、門馬一平、Andi Arfan Sabran (インドネシアスラウェシ)  
 神話撮影 小谷野貴樹、藤田岳夫、山上日向(助手)  
 ドローン 明石太郎、広瀬和久  
 照明 小西俊雄、高橋 勇、矢崎裕太  
 音響・整音 斎藤恒夫、嶋田 正  
 音楽 渥美幸裕  
 音楽デザイン 神 央  
 楽曲提供 GROUND a.k.a GrOun 土、Harikuyamaku  
 台湾プユマ族音楽 「古老的歌謡」 林朱珮  
 録音協力 陳 秀如(台湾)  
 編集 田中藍子、戸谷健吾  
 EED 和田修平、中村桃子  
 監督助手 高橋由佳  
 デスク 渡邊有子、山上亜紀  
 CG 山田みどり  
 タイトルデザイン 杉浦康平、新保韻香  
 学術協力 河野徳吉、小林良生、鈴木三男、小野林太郎  
 福本繁樹 (バブアニューギニア)、坂本 勇 (インドネシアスラウェシ)  
 Ahmad Mufid Sururi (インドネシアスラウェシ)、鄧 聰 (中国)  
 静岡大学農学部応用生命化学科 グリーン科学技術研究所  
 本橋令子、吉村 茜、深沢知加子  
 山梨大学総合分析実験センター  
 瀬川高弘、秋好歩美

DNA 鑑定 中央研究院歴史語言研究所、台湾史前文化博物館、  
 The National Museum and Art Gallery of Papua New Guinea  
 Central Sulawesi State Museum in Palu  
 Bulili Elementary school of South Lore, Central Sulawesi

撮影協力 三浦壽子  
 北村皆雄  
 ヴィジュアルフォークロア

制作 文化庁文化芸術振興費補助金  
 監督 (映画創造活動支援事業)  
 製作著作 独立行政法人日本芸術文化振興会  
 助成



文化庁文化芸術振興費補助金  
 (映画創造活動支援事業)  
 独立行政法人日本芸術文化振興会



倭文

旅する  
 カジの木



—幻の織物 倭文とは—  
 カジの木が渡った海の道をたどり、〈衣〉の始源に迫る旅



日本の神話の再現—!  
 〈衣〉を古代まで掘り下げる

名だたる武神が勝てなかった星の神を織物の神 倭文神が従わせる。

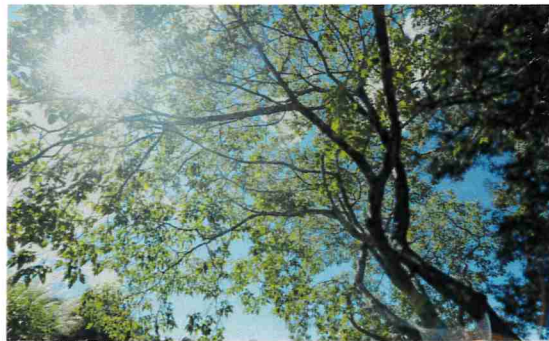
なぜ織物の神が勝つのか。  
 星の神を従わせる力とは何か。  
 倭文とはどんな織物か。

天上界から遣りされた  
 二柱の武神は  
 地上の邪悪な神草木  
 石の類のものごと  
 みを平定した

征伐できなかつたのは  
 星の神 香背男だけだった

それで  
 倭文神 建葉槌命と  
 派遣すると  
 服従した

——『日本書紀』より



旅するカジの木

日本人に忘れられようとしている木がある。  
 その木は、綿（コットン）が登場するまでは、  
 最良の衣料となる繊維植物だった。  
 カジノキだ。中国南部が原産地とされる。

数千年前、海の民 オーストロネシアンが台湾を玄関口に、  
 東南アジアや南太平洋の島々へ拡散していったとき、  
 舟に乗せて運んだ。  
 そのカジノキの樹皮が、植物を利用した最初の〈衣〉となり、  
 今も広く使われている。  
 アジア、オセアニアの旅を通して、〈衣〉とは何かを問う。

倭文は光 暗い世界の邪気を払う

カジノキを携えた人類移動の流れは日本にもやってきた。  
 縄文や弥生時代の遺跡で、  
 カジノキの種子が大量に発見されている。  
 『日本書紀』や『万葉集』に  
 カジの木の樹皮を糸にして織られた幻の織物〈倭文〉が登場する。  
 しかし、現物は残っておらず、その実態は謎に満ちている。  
 カジの木の糸の白さは光の象徴。 ※「カジの木」はカジノキとコウゾの総称  
 〈倭文〉は光の糸を織った布として、神聖な祈りの対象であった。  
 〈マジカルな要素=呪力〉が織り込まれていたのではないか。

それぞれの倭文

現代の織りを担う4人、  
 山口源兵衛（西陣帯匠）、石川文江（カジ布織）、  
 西川はるえ（染織家）、妹尾直子（紙布織）らが、  
 3年がかりでカジの木の樹皮を使い、〈倭文〉の創造的復元に取り組む。  
 それは過去の復元ではなく、新しく現代に通用する〈倭文〉の創造だ。

カジの木と倭文の謎を解き明かし、  
 人を護り、力を与えてくれる〈衣〉の  
 原初の姿を明らかにしたい。  
 今、新しい合成繊維による多種多様な布地が開発され、  
 新時代のファッションとして風靡するなか、  
 もう一度初源に立ち返り、  
 人間にとって第二の皮膚である〈衣〉について考える。

